

オンライン版

資料 No. 12-2026-614 Jan. 2026

<児童、レジャー、ロシア>

無料機関トライアル受付中！

ロシア児童向け刊行物コレクション 1920～1940 年代 Children's Leisure Activities in Russia Online

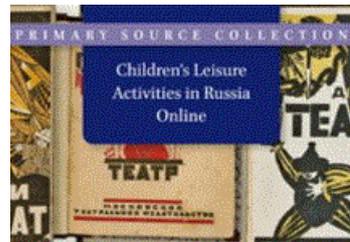
完全買切型 (次年度以降の追加費用は発生しません)

価格はお問い合わせください

<https://brill.com/clro>Advisors: Professor **Vitaly Bezrogov**, MoscowProfessor **Catriona Kelly**, Oxford

Material from K.D. Ushinski State Scientific Pedagogical Library, Moscow

National Library of Russia, St. Petersburg



本書に収録された資料は、ソビエトロシア初期における子どもの社会化という重要な研究領域について、また、「ソビエトの第一世代」のメンタリティーについて、独自の視点を提供するものです。当時、幼稚園教諭に対して、子どもたちに「政治的に正しい」態度を教え込むための方法論的指針が示唆されるとき、「遊び」という方法が用いられていました。

本書は、1917年から1930年代後半まで年代順に、子どもの余暇活動やゲームや競走のさまざまなトレンドについて、その全体像を概観しています。また、モスクワやレニングラードだけでなく、地方で出版された本も収録しており、就学前の児童から8-9才の子どもまで、さまざまな年齢集団をカバーした資料を幅広く掲載しています。収録された記事の多くは、現在では手に入れることが難しい貴重なものばかりです。本書は、子どもの遊びやその他の余暇活動、新年や祝日、劇場、ラジオ、映画などに関連する資料を扱っています。

G.C.19247

Slavic and Eurasian Studies / History



(De Gruyter Brill (Brill), NLD Primary Source / 丸善雄松堂)

《裏面に続きます》

- 掲載製品はリバースチャージ対象製品です。
- 原価の改定、為替相場の変動などの理由による価格の変更や掲載タイトルの変更につきましては、予めご了承の程お願い申し上げます。
- お見積もりは、別途ご用命ください。

ご契約の際は、所属機関のIPアドレスが必要となります。

FTEは問いません。同時ユーザー数は無制限です。

M MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社[学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部]e-mail: e-support@maruzen.co.jp

Children's Leisure Activities in Russia Online

19世紀の終わりから20世紀の始まりにかけて、ロシアの知識人の間で、心理学的／教育学的な現象としての「遊び」に大きな関心が寄せられるようになりました。イタリアの心理学者である Giovanni Amonio Colozza（彼の論文は1909年にロシア語に翻訳された）は、遊びを「外に向けて表現される必要がある内面的な物事の、自由で重要な表現」とであると説明しています。この児童の発達に中心的な役割を果たす「遊び」という観点は、ジェームズ・サリーやG・スタンリー・ホールの研究、さらに、「児童研究」や「児童学」の運動のメンバーの研究にも影響を受けています。1910年代から1920年代にかけてロシアで幅広く出版された”mother's diary”や”father's diaries”は、子どもの遊びを日々の成長の記録の一部として注目しており、その後、遊びを記録する研究はNarkomprosの試験場においても頻繁に行われるようになりました。

遊びに対する心理学的・人類学的な視点はさまざまなアプローチの一つに過ぎませんでした。革命以降、とりわけ1925年を過ぎてから、仲間集団における社会化や将来の大人の役割を学習する際の中心的な要素として、遊びの道具主義的な見方が積極的に採用されるようになりました。遊びは、「政治的に正しい」態度を子どもたちに教え込むための方法論的指針として、幼稚園教諭たちに利用されました。赤ちゃん人形や着せ替え人形は、それらが伝統的なジェンダーのステレオタイプを強化するという理由でふさわしくないものとされ、民族的にマイノリティーの集団の成員を表すような人形については、それらによって子どもに国際主義を教えることができるとしてお墨付きが与えられました。子どもたちは、赤く染められた雪のレンガで、家やイグルー（ドーム状の家）ではなくレーニン廟を作ったり、木製の模型や積み木を用いて協同組合店や集団農場の市場をまねて遊んだりしました。革命以前にも、子どもたちに「理性的な余暇」を与えようとする努力はなされていましたが（1910年代にサンクトペテルブルグのボランディアによって行われた、子どもたちの夏の遊び場がその一例）、革命以降、開拓者とコムソモール（レーニン共産主義青年同盟）の活動によって、都市の街路や中庭における子どもの遊びや農村の子どもの遊びを「一掃する」ことに、多大な労力が費やされました。開拓者たちはまた、「革命的なアバンギャルド」として、まだ「社会化されていない子どもたち」に新しい種類の遊びを宣伝する役割を担いました。具体的には、鳥の巣を無理やり取ってくるのではなく鳥の巣箱を作ったり、「コサックと泥棒」の代わりに「ファシスト」対「共産主義者」という遊びをしたり、コインの「裏か表か」やカードゲームのような偶然に頼るゲームをお金を賭けてするのではなく、健康的で子どもにとって有益な「活動的な遊び」を行いました。

「遊びを通じた社会化」や「理性的な余暇」といった動きは、就学前教育用の’Doshkol’noe obrazovanie”、鉄道学校向けの”Prosveshchenie na transporte”、新学校を目指す人に向けた”Na puti k novoi shkole”といったような雑誌、また、小冊子やパンフレットなど、非常に多くの出版物の中で文書化されています。本書は、モスクワのロシア国立図書館やウシンスキー教育図書館に所蔵されている資料を収録しており、さまざまな傾向の資料の中でも代表的なものを包括的に提示しています。また、モスクワやレニングラードだけでなく地方で出版された本についても収録しており、比較的リベラルな内容の資料とともに極めてイデオロギー色の強い内容もカバーしています。さらに、就学前の児童から8-9才の子どもまで、さまざまな年齢集団をカバーした資料を幅広く掲載しています。本書は、図式的な遊びに関する資料とは対照的に、実際に行われていた遊びの実践に関わる資料を中心に収録しており、その時代に特徴的な遊びについて扱った資料を集めています。また、1930年代後半までの研究を年代順に収録しています（その後、第二次世界大戦が始まり、保育に関する他の領域と同様に遊びに関する研究が中断したため）。

収録された資料の多くが、現在では大変貴重なものとなっています。1936年に児童学に対する偏見によって州令が定められ、多くの図書館で児童学に関する資料や研究に役立つ論文が処分されてしまったからです。収録された資料によって、読者はソビエトロシア初期の子どもの社会化という重要な研究領域について洞察を得ることができるとともに、「ソビエト第一世代」のメンタリティーについて理解を深めることができるでしょう。